



8月園だよりコロナ感染症特集 20



軽症 高热 続いても対象 中等症 肺炎や酸素投与

一般の認識 症状とずれ

「重症以外は怖くない」と思うのは間違いだ。新型コロナウイルスの「第5波」が押し寄せる中、専門家が警鐘を鳴らしている。

一般の人が抱く軽症や中等症のイメージは、医師の捉え方とは大きな隔たりがあるという。感染が爆発的に広まる首都圏などでは、症状によっては入院を制限する方針が打ち出されたばかり。医療現場での正式な分類と実際の症状を知っておきたい。

厚生労働省の「診療の手引き」は、容体や血中の酸素量に応じ、重症度を軽症▽中等症Ⅰ▽中等症Ⅱ▽重症Ⅰの4段階に分けている。

■軽症
せきがあっても息苦しさはなく、肺炎になつていない状態。呼吸器内科が専門で、主に軽症・中等症患者を診る吉島病院（広島市中区）の山岡直樹院長は「軽い風邪症状だけの人も、39度の熱が続いて食事が取れなくなっている人も『軽症』に入る。楽観視しない方がいい」と呼び掛ける。

■中等症
呼吸が少し難しく、肺炎が認められる人は「Ⅰ」、酸素投与が必要な状態まで悪化すれば「Ⅱ」となる。内科医で米ジョージタウン大の安川康助助教は「中等症といってもびんごなない方もいる」とし、「一般的なイメージと医師の見方の違いをイラスト化。ツイッターに投稿している。一般的に『息苦しさは出さず』程度に思われがちな中等症

【新型コロナウイルス感染症の症状とイメージ】

症状	一般の人のイメージ	医師のイメージ
軽症 せきのみで息苦しさなし。肺炎なし	平気 風邪程度	酸素は要らない 「人生で一番苦しい」
中等症Ⅰ 呼吸困難 肺炎あり	息苦しさは出さず	肺炎は広がっている
中等症Ⅱ 集中治療室に入った 人工呼吸器の装着が必要になったりした状態。人工心臓装置「ECMO（エクモ）」を導入する場合もあり、命の危険がある。	集中治療室に入らざるを得なかった人も多数いる」と明かす。	多くの人のとって「人生で一番苦しい」
重症 や嗅覚異常、運動時の息苦しきなどの後遺症が出る可能性に言及。「感染すれば長い期間、苦ししい思いをする上、周りにうつってしまうかもしれない。お盆も県境をまたぐ移動は控えてほしい」と訴える。	集中治療室に入る。もし人工呼吸器が必要	助からないかもしれない

※厚生労働省の「診療の手引き」と安川康助助教のツイッターを基に作成

注意！ 新型コロナ

塩野義製薬は2日、開発中の新型コロナウイルスワクチンについて、最終段階の臨床試験（治験）を2021年中に始めると発表し、21年度中の供給開始を目指す。

塩野義が開発しているワクチンは「遺伝子組み換えたんぱくワクチン」と呼ばれ、インフルエンザワクチンの技術を用いている。

20年12月から日本国内で治験を始め、現在は最終段階の治験に移行するため、厚生労働省と実施計画の具体化に向けて協議に入っている。

塩野義 年内最終治験

ワクチン 年度内供給目指す

政府は6日、新型コロナウイルスワクチンについて、2回目の接種を終えた人に対し2022年に3回目の接種をする検討を始めた。時間の経過に伴いワクチンの効果が低下する可能性が指摘されることや、感染力が強い変異株への対応を念頭に置く。既にメーカーとの間で来年分を確保する契約などを進めており、感染状況や諸外国の動向を見ながら判断する。

一方、米バイオテックノロジー企業モデルナは5日、デルタ株の流行を踏まえ2回接種完了から6〜12カ月後に3回目接種が必要となる可能性があることを前提に、武田薬品工業との間で協議を進めており、計2億回分の確保を目指している。ファイザー製については明らかになっていない。

ただ追加接種を巡っては、世界各国で判断が分かれる。政府は、海外の臨床試験のデータなどを収集し、追加接種の必要性や、2回接種したワクチンと異なる製品を3回目に使うこと、是非などを巡り検討を進める。

日本、3回目接種検討

来年 コロナ変異株に対応

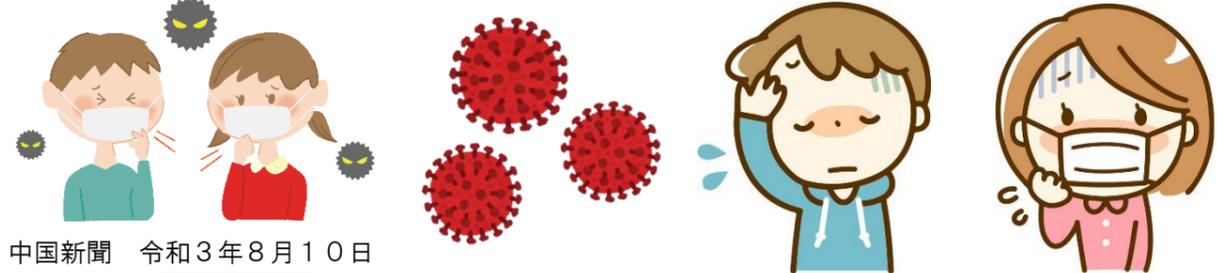
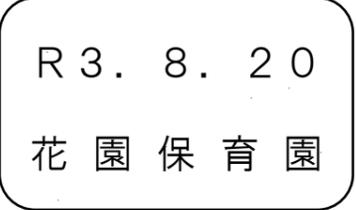
国内で追加接種を行う場合、3回目接種に関する事業承認の一部変更手続きが必要。承認されれば、予防接種法上の取り扱いについて、厚生労働省の専門分科会で議論するとみられる。

モデルナが5日に発表した治験結果によると、2回接種完了から6カ月の間、発症を防ぐ有効性は93・2%と高い水準が保たれた。ロイター通信によると、デルタ株流行前データという。

政府は6日、新型コロナウイルスワクチンについて、2回目の接種を終えた人に対し2022年に3回目の接種をする検討を始めた。時間の経過に伴いワクチンの効果が低下する可能性が指摘されることや、感染力が強い変異株への対応を念頭に置く。既にメーカーとの間で来年分を確保する契約などを進めており、感染状況や諸外国の動向を見ながら判断する。

一方、米バイオテックノロジー企業モデルナは5日、デルタ株の流行を踏まえ2回接種完了から6〜12カ月後に3回目接種が必要となる可能性があることを前提に、武田薬品工業との間で協議を進めており、計2億回分の確保を目指している。ファイザー製については明らかになっていない。

ただ追加接種を巡っては、世界各国で判断が分かれる。政府は、海外の臨床試験のデータなどを収集し、追加接種の必要性や、2回接種したワクチンと異なる製品を3回目に使うこと、是非などを巡り検討を進める。



中国新聞 令和3年8月10日



ワクチン不足

続く混乱、64歳以下直撃

市区町村が進める新型コロナウイルスワクチン事業の中心が、高齢者から64歳以下の住民に移る中、各地で「ワクチンが足りない」との訴えが上がり接種が思うように進まない状況になっています。

Q なぜですか。
A 自治体は主に使っているワクチンは米ファイザー製です。この供給が7月から減少し、善後策に迫られています。

Q これまではどうだったのですか。
A 菅義偉首相が高齢者接種の7月完了や、全国で1日当たり計100万回というハイペース接種の目標を掲げ、5月以降、潤沢な供給が続いていました。事業加速を求められた自治体は計画や予定を前倒ししたほか、医師ら打ち手を確保し、1日に打てる人数を増やすなど、さまざまな努力と工夫をしてきました。

Q 自治体は打つ能力を高めてきたんですか。
A 各自治体の接種能力を全国ベースに置き換えると「1日200万回超」の猛スピードになる自治体もありました。

Q 政府の想定を超える速度ですね。
A それを支えていたのはファイザー製の潤沢供給です。4〜6月に約1億回分が輸入されました。7〜9月は、約7千万回分と3割減となり、自治体に混乱が起きました。国が急減するという情報を事前に自治体に十分に伝えてこなかったことも背景にあります。

Q 影響はありますか。
A 接種能力が高まった自治体は、今までのワクチン接種を求めていたのに、希望量の半分や3分の1しかもらえないとの声が上がります。シヨック状態となり、予約を取るわけにはいかないと、予約の受け付け停止や延期、予約枠の縮小などが続いています。

Q 今後はどうなってしまうのか。
A 国の供給量が減るのに合わせ、スピードを調整、減速していくことになり、多くの住民が早期接種を求めています。国は現場を預かる自治体が事業計画を立てやすいよう、早めに具体的な供給量を示すなど丁寧な対応が必要とされています。

Q 国はどうか。
A 今までに配った分が自治体側にあるはずで「ワクチン不足」の立派な原因は、接種が済んだ回数について「ワクチン接種記録システム（VRS）」で管理されています。6月末時点で、全国に配送されたのは約8800万回分。VRS上で見ると、ワクチンが使われた「接種済み」は、約4800万回分です。差し引きで残る約4千万回分は、自治体や病院などに「在庫」としてあると見られます。

Q 在庫の活用を、というのですか。
A 在庫を当て込めば今後「1日120万回」程度のペースは維持できるとしています。

Q 自治体はどうしましたか。
A 国の言う在庫の多くは、住民の2回目を使う分他に回せる余剰分ではない。十分な供給がないと、新たな予約が取れないと困っています。

Q 溝がありますね。
A VRSは、自治体側による入力作業が必要で、タイムラグが生じています。データより実際の接種済みの数は多いのです。通勤先など居住地以外でも打てる特例があり、自治体は手持ちのワクチンを消費するのに、居住者でないため接種済みにカウントされません。実際の在庫はなくなるのに、データ上は「ある」となっています。